

野内村

〈現青森市〉

のないむら

陸海資源に恵まれた地

野内村は、現青森市東部の夏泊半島の付け根に位置する村だった。青森市の奥座敷として有名な浅虫温泉も、昭和の大合併前は野内村にあった。

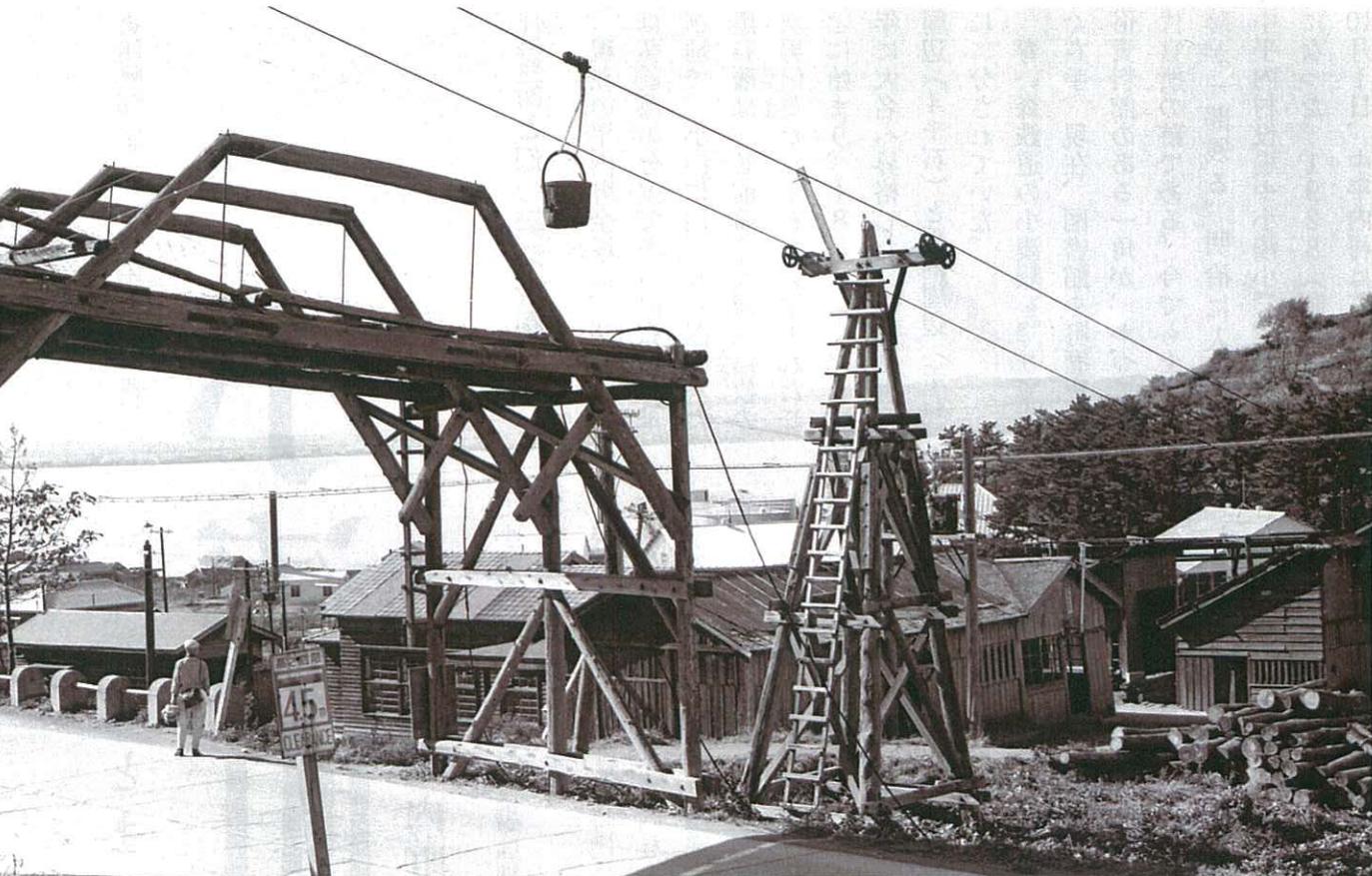
1891（明治24）年9月1日に浅虫（現浅虫温泉）駅が開業して以降、浅虫温泉はにぎわうようになり、旅館の番頭さんたちが駅に降り立つ客を誘引し合った。戦前から戦後にかけて浅虫温泉は「東北の熱海」と称され、高度経済成長前後は青森県内有数の歓楽街だった。

1924（大正13）年、海岸沿いに東北大學臨海実験所の附属浅虫水族館ができた。水族館は県内

の幼稚園や小学生たちの遠足場所として人気があった。遊覧船に乗って、水族館を見物し、海岸で遊ぶことは子どもたちにとって最高の楽しみだった。

村の中ほどに位置した久栗坂地区には村役場が置かれた。観音寺の眼前に広がる海岸ではホタテの漁が行われ、一時期は海苔も養殖されていた。現在は、観音寺背後の山が採石のため姿を変えたが、海岸風景は今も美しい。

村の西部に位置した野内地区には、1893（明治26）年7月16日に野内駅が開業。1906（明治39）年にはイギリスの石油会社ライジング・サンが、石油貯蔵タンクを駅前に建設した。大湊要港部の開港や北洋漁業の推進で、軍



東岳の石灰岩を野内駅まで運ぶ架空索道=1959(昭和34)年10月13日(川村昭次郎氏撮影、川村英明氏提供)

艦や漁船の石油需要が増加すると見込んでいたのだ。
野内村に石油基地ができたことで、同年、政府は青森港を東北唯一の外國貿易港として特別輸出港に指定した。しかし、重要な石油基地だったために、アジア太平洋戦争末期の45（昭和20）年7月、アメリカ軍から空襲された。

野内駅には、天間林村（現七戸町）にあった上北鉱山や東岳からの鉱産物が、架空索道（ロープウェー）を通じて運ばれていた。駅の構内には木材集積場や碎石場があつた。駅周辺には食堂や商店が数多く集まつた。

浅虫温泉に多数の観光客が訪れ、久栗坂の海岸に豊かな海産物が揚

【一口メモ】野内村は1889（明治22）年4月1日の市制町村制施行で、野内、久栗坂、浅虫の3村が合併して成立。役場は久栗坂に置かれた。1962（昭和37）年10月1日に青森市へ編入合併した。村名は消えたが、

がり、野内駅には多種多様な鉱産物が運ばれていた。野内村は陸海資源に恵まれていたといえよう。

青森市と合併の際に反対論が根強く、紛糾を続けたゆえんである。

現在、上北鉱山や東岳の鉱産物は採掘されていないが、石油やガスタンクは存在する。浅虫温泉も歓楽街ではなくなつたが、温泉の価値や海岸の美しさは変わらない。

2011（平成23）年4月、青森市の篠田にあった青森県立青森工業高校が野内地区へ移転した。このため、3月12日に野内駅は青森駅方面へ約1・5キロ移転新設された。陸海資源の宝庫だった野内地区は、若き人材が集まる地域として変貌しつつある。



修学旅行で浅虫温泉街にやって来た三戸町立三戸小学校の子どもたち=1955(昭和30)年6月23日(三戸学園三戸小・中学校提供)